

2006 年度

B0562011

ノーマンド ケン

「アルゼンチンの経験に見るラテンアメリカの社会保障制度 - Plan Jefes の持つ可能性 - 」
The Impact of Social Security in Latin America - A Case Study of *Plan Jefes* in
Argentina -

貧困率が人口の 4 割以上に達し、格差拡大も大きな問題となり続けているラテンアメリカの現状を改善するには何が必要なのか。継続的な経済成長は求められるが、格差が固定化してしまっている社会ではまず、貧困者や高齢者の最低限度の生活を保障する制度が必要となる。それでは、貧困や格差といった問題により効果的に対応できる制度とはどのようなものなのか、というのが本稿の主眼である。

現在のラテンアメリカにおいては、社会保障制度の中でも社会保険制度に限界がある。それは年金や医療保険のカバレッジの低さや財政負担の大きさ、貧困者や失業者に対する保障ができていないことなどからも明らかである。従って、社会扶助プログラムにこそ貧困削減を達成する可能性があるのではないかと考える。本稿で取り上げるアルゼンチンでは、経済危機後に大規模な雇用プログラムが実施され、それが一定の効果をあげている。

本稿で分析する Plan Jefes (失業世帯主プログラム) は経済危機後のアルゼンチンにおいて多くのメリットを生み出した。Plan Jefes は貧困率や失業率に対する短期的・長期的な緩和に成功し、コミュニティに必要なサービスを提供するという性質のためにこれまで労働市場に参加することが難しかった女性が活躍できる機会を多く提供した。また、200 万人以上が加入し、ターゲティングにも成功したプログラムであり、対 GDP 比で 1% 未満という少ない財政支出でこれほど大規模に貧困者や失業者を支援できたという事実はラテンアメリカでは他に例を見ない。ブラジルやメキシコのようにカバレッジの高い所得移転プログラムを実施しているケースはあるが、こうしたプログラムの人々は福祉依存を進めてしまう可能性がある。その点で Plan Jefes はラテンアメリカにおける貧困や失業などの問題を効果的に改善できる、ただのばら撒きではない有効な政策となり得る。Plan Jefes はこれまでラテンアメリカの社会保障制度から抜け落ちてしまっていたセーフティ・ネットとしての社会扶助プログラムが初めて導入されたケースであり、経済が危機に陥る可能性が常に存在し、巨大なインフォーマル・セクターや貧困層を抱えるラテンアメリカにおいて画期的な試みであった。

アルゼンチンは世界銀行の政策によって Plan Jefes の縮小を進めているが、Plan Jefes と同様の雇用プログラムが他のラテンアメリカ諸国に広がる動きも見られ始めている。

もちろん、Plan Jefes のような社会扶助プログラムですべての問題を解決できる訳ではない。回復工場やマイクロクレジットなどの仕組みは広く導入されるべきであり、政府が政治的な理由で Plan Jefes を拡大するのは避けなければならない。

このように、失業者や貧困者などの生活を保障し、なおかつ自立も促すような社会扶助プログラム、特にコミュニティー・ベースの雇用プログラムは今後、ラテンアメリカを始めとする、経済的に脆弱な途上国で生かし得るであろう。